

【挨拶と趣旨説明】

ミニ・シンポジウム
「京都から発信する非行防止の先進的な取り組み」

田村正博

社会安全・警察学研究所 所長
京都産業大学法学部 教授

成田秀樹

社会安全・警察学研究所 所員
京都産業大学法学部 教授

成田：ただ今から京都産業大学社会安全・警察学研究所のミニ・シンポジウム「京都から発信する非行防止の先進的な取り組み」を開催します。最初に、社会安全・警察学研究所の所長である田村正博よりご挨拶申し上げます。

田村：今日は皆さま、大変お忙しいところ、わざわざお越しいただきまして、誠にありがとうございます。とくに長者先生には感謝申し上げます。

研究所は今年で4年目を迎えました。これまでシンポジウムと申しますと、研究所外の研究者が登壇したり既存の研究を紹介したりするシンポジウムばかりでした。しかし、今回は私どもの研究所で実際に調査を行った成果を発表するという初めての機会になり、私どもとしても大変喜ばしく思っております。

本日は、学校の非行防止といまでしょうか、より広い意味での健全化と申しましでしょうか、そうした取り組みについて、実際に音頭をとられた先生と、そして調査にあった研究者がコラボレーションしながら、非行防止につながる取り組みがどのようなものであるのかということをご披露することになります。

貴重な機会ですので、どうか活発なご意見をいただき、実りあるシンポジウムにできればと思っております。

成田：ありがとうございました。それでは次に、社会安全・警察学研究所署員の私から、趣旨説明を行います。

京都産業大学の社会安全・警察学研究所は、2013年4月に設立されました。当研究所は、犯罪や非行と相関関係にある事象、つまりリスクとなる要因を見極め、先手を打った改善策や解決策について研究を行う機関として創設されました。名称に警察学という名前が入っている私立の研究機関としては、我が国で初ということになります。

京都産業大学では、研究所は特定のテーマを3年間に渡って調査するという仕組みになっており、当研究所としては、第1期であるこの3年間の研究テーマを「子どもと安全」に設定し研究を進めてまいりました。

子どもの犯罪や非行に関しては、子どもの生活領域全般に渡ってリスク要因が潜んでいます。そうしますと、リスク要因の一つ一つにしか関わらない専門機関が単独で努力するだけでは不十分で、関係する多くの機関が連携して対処し、解決策を講ずる必要性が高くなります。そこで、そのような観点から、どのような具体的な改善策が効果的か、その理論的根拠はどのようなものか、各機関の連携の仕組みをどのように広げることができるか、これらをテーマに研究を行ってきました。本日報告を行うのは、そうした連携の拠点となる学校を対象とした調査の成果になります。

調査を行うにあたっては、京都市教育委員会様より、効果的で特徴のある取り組みを行っている中学校として、修学院中学校と嵯峨中学校、この2校をご紹介頂きました。修学院中学校では、地域と連携した教育プログラムに特徴があります。例えば、あるプログラムでは、中学1年生が認知症サポーター講座を受講し、中学生が地域の高齢者や認知症の問題の解決に何らかの貢献をするというかたちで、地域との関わりを深めています。他方で嵯峨中学校では、地域と連携した教育プログラムとして、嵯峨中パレードという行事に取り組んでいますが、ここでは、パレードの中で中学生が手作りのみこしを担いだりして、町おこしに貢献しています。本日は時間の関係もあり、また基調講演が修学院中学校で校長の職にあった長者先生ですので、修学院中学校での取り組みを紹介することが中心となります。

まず「非行防止につながる効果的な取り組み」というテーマで、長者先生から具体的にどのような取り組みを行っていたのかをご紹介します。次に、研究所員の久保秀雄が「非行防止はいかにして実現したのか」というテーマで、理論的に考察を加えた成果を発表します。その後、いったん休憩をはさみ、パネル・ディスカッションでは、「非行防止の取り組みをどう広げるか」というテーマで、長者先生、久保に加えて、京都府警察本部少年サポートセンター副所長の足立弘氏に、話を深める議論のきっかけを作っていただきたいと存じます。パネル・ディスカッションでは、フロアからも積極的なご発言を賜れば幸いです。

それでは基調講演に移ります。長者先生、どうぞよろしく願いいたします。